

2007年夏 北タイ・スタディツアー報告

岩垂雅子

本稿は、NGOのLink～森と水と人をつなぐ会～¹が主催する2007年夏のスタディツアー、およびタイのNGOアサーパッタナーデック（VCDF）²に所属する日本人スタッフ出羽明子氏のストリートチルドレン支援活動の見学を通して得た知見を記したものである。なお、このスタディツアーへの参加費用の一部に各科専任教員海外派遣制度の助成をうけた。

[スタディツアーの概要]

主催：NGO Link～森と水と人をつなぐ会～（代表 木村 茂氏）

行程：8月1日（水） チェンマイ市内およびナイトバザールの見学（チェンマイ泊）

2日（木） チェンマイ県北部のチャイプラカン郡において、集落の農業や環境保全の取り組みを見学（ホイボン集落ホームステイ）

3日（金） チャイプラカン郡に隣接したファーン郡でミカンのプランテーション見学後、有機農業に取り組む農場を見学（ホイボン集落ホームステイ）

4日（土） ホイボン集落で自由行動。村の伝統的な生活を体験する。（ホイボン集落ホームステイ）

5日（日） ビルマ（ミャンマー）との国境の町メーサイ、ゴールデン・トライアングル、チェンセン、チェンライを見学（チェンライ泊）

6日（月） チェンマイに戻り、Link事務所にてワークショップ（チェンマイ泊）

[タイ王国]³

面積：514,000 km²（日本の約1.4倍）

人口：6,242万人（2005年）

首都：バンコク

¹タイのチェンマイを拠点にアジア各地の人々と連帯を築き、それぞれの地域にくらす人々が民族や宗教を越えて互いを尊重し協力し合いながら、自然との共生を通して持続的な社会の実現を図ることを目的として2004年1月に設立されたNGO。 http://www.geocities.jp/link_chiangmai_forest/index.html

²มูลนิธิอาสาพัฒนาเด็ก（The Volunteers for Children Development Foundation）。ビルマ（ミャンマー）との国境に接するチェンライ県、チェンマイ県を中心にストリートチルドレンの保護・支援活動を展開しているNGO。 <http://vcdf.hp.infoseek.co.jp/>

³<http://www.mofa.go.jp/mofaj/area/thailand/data.html> より

民族：大多数がタイ族。その他、華人、マレー族、山岳地帯の少数民族など。

言語：タイ語、少数民族の言語など

宗教：仏教 95%、イスラム教 4%、その他。

略史：タイ王国の基礎は13世紀⁴のスコータイ王朝時代に築かれ、その後アユタヤ王朝（14～18世紀）、トンブリー王朝（1767～1782）を経て、現在のチャックリー王朝（1782～）に至る。1932年立憲革命。

政体：立憲君主制

元首：プミポン・アドゥンヤデート国王（1946年6月即位「ラーマ9世王」）

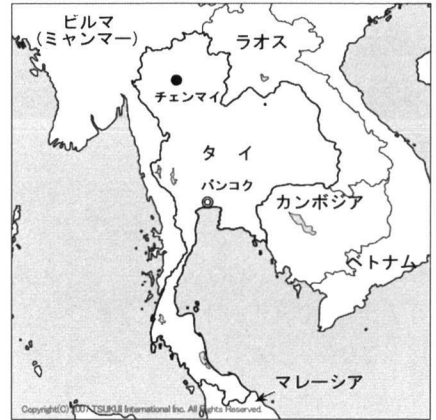


図1 スタディツアーの起点チェンマイ市の位置

【チェンマイの多様なエスニシティ】

第1日目にチェンマイ市内を巡検した。チェンマイの歴史はランナー王朝が1296年に都市を建設したことに遡る。チェンマイの市街地は碁盤目状に築かれた旧市街と、外堀を隔てて広がる新市街からなる。堀の内側を囲んでいたかつての城壁は道路建設のため取り壊され、今では東門にあたるターペー門など復元された四方の門と、角地に残る瓦礫がその名残を留めている。首都バンコクを貫流するチャオプラヤー川の支流ピン川が市の東側を南に流れ、ピン川から旧市街にかけての一角は昔から商業が盛んな地域となっている。チェンマイにはランナー王朝時代からのものも含めて100を超える寺院があり、早朝の街角には黄衣をまとった仏僧の托鉢姿が見られる。ピン川沿いには、かつて舟運で栄えたショップハウス様式⁵の古い商家がいまでも何軒か残っている。これらの古い建物は現在、骨董屋やカフェとして内装を改め多くの観光客で賑わっているが、船に荷の揚げ降ろしするための倉庫として使われた広い空間や、通りに面して掲げられている漢字で書かれた中国語の看板が往時をしのばせる（写真1）。

このピン川の東岸にはシーク教の寺院が建っている（写真2）。もともとシーク教徒は主に生地を扱う商人としてインドから渡来した。今でも市場の反物を扱う店ではターバンを巻いたシーク教徒の姿をみかける。ピン川の河岸からナイトバザール地区に向かう途中、モン、ヤオ、ラフ、リス、アカ、カレンなどの山岳地帯の少数民族の伝統衣装や土産品を扱う店が軒を連ねる地区を通りかかった（写真3）。さらに、そのすぐ近くの路地にはムスリム（イスラム教徒）の集住地区があり、ムスリム向けの食堂や食材店、学校、礼拝堂

⁴タイでは仏暦が用いられるが、本稿では西暦で統一して表記する。

⁵中国南部の建築様式の一つで、間口は狭いが奥行きが深い中層・低層の店舗付き住居。東南アジアの都市部にある華人の集住地区に多くみられる。

(モスク)などが建ち並んでいた (写真4).



写真1 ピン川沿いに残るショップハウス
(左の建物は現在骨董品店, 右のレストランの建物正面には「永源」と書かれた看板が残っている)



写真2 チェンマイ市内のシーク教寺院



写真3 山岳地帯の少数民族の土産物店が軒を連ねる路地

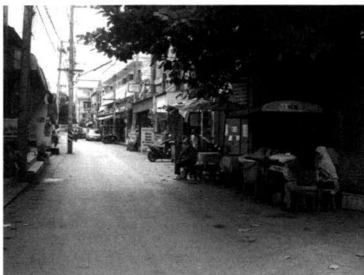


写真4 ムスリム集住地区の路地(左) ムスリム向け食堂兼食材店の看板(中央) ムスリム向け食堂の店主(右)

[ナイトバザールのストリートチルドレン]

チェンマイ観光の目玉の一つにナイトバザールがある。17時ごろから深夜まで、タイの手工芸品や雑貨を売る店、食堂、タイ古式マッサージ屋などが煌々と電灯が明るく照らす通りを埋め尽くし、大勢の観光客で賑わう。山岳地帯の少数民族が自分達の伝統衣装や装飾品を売っている屋台も並んでおり、道端には伝統衣装を身にまとった人たちもみられた。

このチェンマイ屈指の観光地ナイトバザールでは、麻薬取引や人身売買、売春、児童労働などが頻繁に行われている。北タイでストリートチルドレンの支援活動を展開しているタイの NGO アーサーパッターナードック (VCDF) のスタッフ出羽明子氏によれば、タイでは 90 年代に入って急速に大都市の夜の繁華街で物乞いや物売り、売春、麻薬取引などに携わるストリートチルドレンが急増し、99 年にはチェンマイだけでも 263 人が確認された。増加の原因には、隣国ビルマ (ミャンマー) からの難民や貧困、麻薬中毒に苦しむ親元で家庭の不和、暴力、さらには家庭崩壊などの問題に直面し、路上での生活を強いられる社会的背景があるという (写真 5)。このようなストリートチルドレンは過酷な児童労働、児童買春、麻薬、HIV 感染等の被害者になりやすい (図 2)。そうした子どもたちをシェルターハウス (緊急避難施設) に保護し、共同生活を通して将来的に自立できるよう職業訓練などを行う活動が様々な NGO によって展開されている。それら支援活動にもかかわらず、ナイトバザールに出入りする子どもの数も急速に増加の一途をたどり、とりわけ酒場や遊戯場に入出入りする麻薬の運び屋や酒場の接客として働く青少年が増えている (写真 6a)。今回の海外研修では、出羽氏がチェンマイのナイトバザールを歩きながら道端で物乞いや物売りをする子どもに声をかけたり、シェルターハウスから逃げ出した子どもと接触を図ったりする活動に同行し、ストリートチルドレンの実態と地道に保護活動に取り組む NGO 活動の一端を見学することができた。ナイトバザール脇の路地に外国の NGO が建てた、深夜に働く子ども向けの休憩所 兼 駆け込み寺の施設があったが、訪れたときはあいにく扉が閉ざされていた。出羽氏によれば、「この施設が子どもを集めて、人身売買業者に売り飛ばしている」という風評が立ち、最近閉鎖に追い込まれたとのこと



写真 5 ビルマ (ミャンマー) との国境付近のストリートチルドレン (左)



図 2 観光客への啓発ポスター (中央・右、タイ語と英語で“児童買春は犯罪です!”と呼びかける、VCDF 資料より)



写真6 a. ナイトクラブで接客する少年（VCDF 資料より） b. ナイトバザール地区で働く児童の休憩所（筆者撮影）

（写真 6b）. 眩いナイトバザールの灯りのなかに途上国に蔓延する深刻な児童労働問題の複雑な一面を垣間見た。

[コミュニティ林活動]

スタディツアー 2 日目、コンムアン（北タイに住むタイ人）のホアファイ集落における住民組織「ファン川流域ネットワーク」のブンレン氏から住民組織結成の経緯や当時の社会背景、活動内容について話を伺った。先祖伝来の人間と自然の共生に基づいた山村集落の伝統的な生活が、ここ 20～30 年の間に生じた工業化や農業の近代化によって大きく変化したという話はとりわけ興味深かった。村に貨幣経済が浸透した結果、「プームパンヤー（古くからの村人の知恵）」が顧みられなくなり、村人同士の結びつきは変質し、かつて「森は村人のスーパーマーケット」と称された豊かな森が商業伐採や耕地への転用によって荒廃していく。近代化以前には森と川と人間によって構成された山村の生態系のもとの伝統的な生活が、近代化とともに環境悪化や共同体の崩壊といった困難に直面するというプロセスは、国や地域を問わず何処も共通しているように思えた。

こうして大きく変容した村で、コミュニティをどのように再構築していくか。村人が自ら問題提起をして、解決にむけて知恵と資金を出し合い、様々な活動が試みられている。伐採業者と村人の利害が大きく対立し、時には村のリーダーの命までが危険に晒されながらも、村人たちは目標を見失わずに村の再生に心血を注いだ。ブンレン氏の話から、彼らのコミュニティ再生への強い信念や、出稼ぎという選択肢を選ばずに村に留まり続ける固い決意を窺い知ることができた。

村を再生する様々な試みの一つに、「コミュニティ林の地図作成プロジェクト」がある（写真 7a, b）。タイ政府は 1980 年代後半から、「環境保全」を理由に森林地帯の多くを国立公園などに指定して村人の利用を排除した。面積のおよそ 7 割が森林に覆われる北タイの山村集落のなかには、自分たちの生活に欠かせない森林利用の重要性を訴え、自主管理の実績を積むことで世論を形成し、森林の持続的な利用を認める「共有林法」の制定にむ

けて活動する動きもみられる。その結果、いくつかの地域で森林局が村人の利用を黙認する動きが出ているものの、役所の黙認を得るためにはGPS（全地球測位システム）に基づく地図の作成が求められるなど、様々な専門知識が不可欠になる。そこで、NGOのLinkが共有林の範囲を示す地図の作成に技術的な指導を行い、その技術を利用して森林局から村人たちの自主管理と利用を認めてもらうための活動が展開されている。

話の終盤に、ブンレン氏は村人が苦心の末に作り上げた村の水系図を誇らしげに見せてくれた。「村の周辺でもここ数年、異常な気温上昇による畑作物への影響が報告されている。将来的には地球環境問題について我々の取り組みをこの村から何らかの形で外部に発信していきたい」と大きな夢を語ってくれたブンレン氏の言葉が忘れられない。



写真7 a. 村人が作成した共有林の地図模型（LinkのHPより）



b. 土地利用の情報更新作業（筆者撮影）

[タイの有機栽培農家訪問]

スタディツアー3日目、ファーン郡で有機農業の技術開発と普及促進活動に取り組むISAC（Institute for Sustainable Agriculture Community）の支援を受けて有機ミカン園を営む村人の農場において、住民組織メンバーのマイトゥリー氏からお話を伺った。古くから交易で栄え、一面の水田とレイシ（リンチー）の果樹園が広がっていたファーン盆地では、近年、バンコクなどから資本が進出して土地が買占められ、大規模なミカン農園の造成が急速に進んで土地や水の奪い合い、農薬の大量散布による住民の健康被害などが深刻化している。ISACの農場では、これら農業の近代化がもたらした諸問題に対して、農民とNGOが問題解決に向けて取り組んだ活動について詳しい話を伺った。健康被害や生活環境の悪化について農民たちが行政やミカン農園の企業に重ねて訴えても、黙殺され続ける話には深い憤りを覚えた。それでも決して泣き寝入りすることなく“起き上がりこぼし”のように何度も立ち上がり、抗議行動に手を尽くした後も地道に持続可能な有機農業

に取り組む，ひたむきで前向きな村人たちの底力に深い感慨を覚えた．最後に，マイットウリー氏が目の前の畑から収穫したばかりのインゲン豆やパイナップルをご馳走してくれた．いずれも，自然の甘味が豊かで，実に美味しかった．「化学肥料や農薬なしでもこんなに美味しく出来るんだ」と誇らしげに語る姿がとても印象的だった(写真 8a, b)．



写真8 a. マイットウリー氏自作の木酢液抽出装置



b. フェーン有機栽培健康マーケット

[ホイボン村での農家ステイ]

フェーン郡での3日間は，日中に Link の活動を見学して，夕方になるとホイボン集落の農家でホームステイを体験した．ホイボン集落はパカニョー（カレン）の集落で，村人の多くは敬虔なカトリック教徒である．集落の周りは小高い山に囲まれ，バナナやインゲン豆，レイシ（リンチー）の畑と水田が広がる小さな山村集落である（写真 9a, b）．伝統的な木造の高床式住居で生活しているホストマザーのヌクーさん夫婦と娘ムクーさん夫婦の4人家族の農家にお世話になった（写真 10）．ホストファミリーとのコミュニケーションは，予め Link のスタッフに教えてもらったパカニョー語の「こんにちは」「ありがとう」「食事」「美味しい」「トイレ」という5つの必須用語と，日本から持参した「指差しタイ



写真9 a. ホイボン集落の田園風景



b. 集落遠景（中央にキリスト教会堂の塔がみえる）



写真10 ステイ先の家(左)と台所兼食堂(右)

語」の本，あとは身振り手振りの表現力と度胸だけが頼りだ。夕方，NGO 活動の見学から戻るとホストファミリーに預けられる。言葉に不自由して最初のうちは戸惑い心細く感じたが，ホームステイの受入れ経験が豊かなヌクーさん家族に温かく迎えられ，その後3日間は何不自由なく快適な農家ステイを楽しむことができた。

ホームステイでは見るもの聞くもの食べるもの全てが新鮮だった。高床式住居の床下をニワトリ，犬，猫がけたたましく走りまわる。庭に紐で繋がれた豚の親子がブヒーブヒーと大声で喚き空腹を訴える。用を足すには庭先の小屋に足を運ばねばならない。夜は小型の蛍光灯が心細く灯り，皿洗いや洗面，水浴びは山の清水を引いた簡易水道一本だけ。盛夏であっても真水での水浴びは辛かったが，高地で寒さの厳しい冬はいったいどうするのだろうか。集落には電気が通っており，いくつかの家庭にはテレビや冷蔵庫も備え付けられていた。

ホイボン村で過ごした3日間のホームステイの最終日には，終日ホストファミリーと過ごす自由行動日が設けられていた。都会で生まれ育った私にとっては，農村の日常生活は何もかもが興味深い。土いじりが好きな私は，自由行動日のイベントとして迷わずホストファミリーの生業である畑仕事を願い出た。農作業服に身を包み，山の向うの畑まで20分ほど山道を歩く。道中，藪こぎで何度も足をとられ，小さな川を渡るときに片肩に背負った鍬の重さにバランスを崩して，あやうく泥川に落ちそうになったりもした。畑にたどり着くまでが一苦労だ。畑では30~40cmに成長したインゲン豆の苗の周りの土をほぐす作業を「手伝った」。腰を曲げて鍬を小まめに動かしながら土ほぐしをはじめたわずか15分ほどで腰に痛みを覚えた。だんだん疲れてきて集中力が途切れたその時，インゲン豆の苗を1株バッサリと鍬で刈り取ってしまった！ せっかく種まきして大切に育てている彼らの貴重な糧を台無しにしてしまったのだ。これでは「手伝い」どころか「ありがた迷惑」の押し売りだ。休み休み耕しながら午前中いっぱい畑を過ごし，昼食をとり家に戻った。青空のもと，農作業で乾いた喉を畑に植えられているレイシ（リンチー）の木からもぎ取った実で潤した休憩のひと時が忘れられない。



写真 11 ホイボン村のヤシの木登りに挑戦



収穫したヤシの実で村の子供たちとおやつ作り

昼食のあと、隣に住むヨハンさんがやって来て庭のヤシの木に登りはじめた。あっという間に木のとっぺんに辿り着いて、頭上から椰子の実を3つ4つ切り落とした。小さい頃から木登り好きの私は急に童心がよみがえり、ヨハンさんが地面に降り立つやいなや、やおら椰子の幹に足をかけて木登りに挑戦しはじめた。身軽だった幼少の頃とはだいぶ勝手が違うことに間もなく気づき、木の半分あたりでギブアップした。ところが、足掛かりを見失って下りられない…。必死で幹にしがみつくと腕が体重を支えきれなくなって痙攣し始めた。飛び降りて足の骨を折ったらどうしよう、と焦り始めたころ、見かねたヨハンさんが足掛かりになる幹の窪みに私の足を置いてくれて、なんとか地上に生還することができた。収穫した椰子の実を割って中のジュースを堪能し、削った胚乳を上新粉と混ぜバナナの葉に包んで蒸したココナッツ団子をオヤツに頂いた。夕食後には、スタディツアー参加者と村人たちの交流会が開かれた。日本から持参した習字道具を用いて、ツアー参加者が村人たちの名前や好きな言葉をしたためた。最初のうちは筆運びを遠巻きに見守っていた村人たちも次第に興味を示し始め、終いに自分たちの言葉を自ら筆を持って書いたり、子供たちは墨汁に手足を浸して手形や足形をとって楽しんだ。習字大会のあと、古くから村に伝わる歌を村人たちが披露し、ツアー参加者は日本の唱歌「ふるさと」を唄って村での最後の夜の思い出深いひとときを過ごした(写真12)。



写真 12 交流会で村人たちと習字を楽しむ

[北タイの農村が抱える問題—少数民族・難民問題、HIV感染、人口増加など—]

他国に比べて日本では、「民族問題」は身近に感じにくいテーマの1つである。日本のメディアで取上げられるタイの民族問題といえば、ごく稀にタイ南部のイスラム教徒の反

政府活動が小さく報じられるに留まり、北タイの少数民族問題が認識される機会はきわめて少ない。北タイ地域はビルマ（ミャンマー）やラオスと国境を接し、周辺の高岳地帯にはたくさんの少数民族が住んでいる。近年、ビルマ（ミャンマー）の内戦や貧困に苦しむ高岳地帯の少数民族が盆地に降りてきて、ミカン農園などでの低賃金労働に従事し、中には犯罪に巻き込まれるケースも少なくない。ただでさえ、児童買春や HIV 感染、臓器売買は重大な社会問題である。それに加えて、本国ビルマ（ミャンマー）でもタイでも国籍を与えられない越境難民の少数民族がそうした犯罪被害者になっているのだから、問題は極めて複雑かつ深刻である。タイ政府は、人身・臓器売買の被害者がタイ国籍を持たないことを理由に、タイ国内の問題として対処することに極めて消極的である。日本では 2007 年の夏に「民法 772 条による無戸籍児」の存在が大きな社会問題⁶として注目を集めたが、タイの少数民族の場合は国籍がないために社会的に存在が否定されるだけでなく、命の存在までもが無視される。国籍の有無で、人の命に軽重の差が生じているという事実を知り愕然とした。スタディツアーの終盤に訪れたチェンライ市郊外のスンド村を訪れた際にも、麻薬犯罪の濡れ衣を着せられて死刑判決が下されたものの、その後冤罪が確定し、無事釈放されて村に戻ってきた少数民族ラフの村人に会った。穏やかな村人たちの生活が、少数民族というだけで常に様々な犯罪の危険と隣りあわせに置かれている社会、そして、国家までもが少数民族の人々の存在を脅かす、というタイ社会の抱える厳しい現実の一面を垣間見た。

[問題の解決に向けて]

タイは日本人にとって最も好まれている海外旅行の渡航先の 1 つで、私自身も今回のスタディツアー以前に首都バンコクは 3 度ほど訪れた経験がある。バンコク都心部に滞在している限りは、「タイ人は穏やかで比較的治安もよく、インフラも整備されつつあるし、都心部の高層ビル群は東京を凌ぐほどの発展ぶりだ。さすが、ASEAN の牽引役だけある」とタイ都市部の表面的な「光」の部分ばかりに目が向いた。しかし、今回のスタディツアーを通して社会的弱者の人権問題や公務員の汚職など、タイ社会が恒常的に抱える「影」の側面を見聞きし、均整を欠いたタイの経済発展の歪みが社会の隅々まで深く根を下ろしていることがわかった。

いかなる施策によっても、こうした問題を一朝一夕に解決することは不可能であるが、やはり現状のままではいけない。タイ社会の問題はタイ政府がまず問題を正視して解決に取り組むべきであることは言うまでも無い。しかし、自浄作用が機能せず長らく放置されてきている現状のもと、タイ政府が自ら取り組まないのであれば、より多くの手段を用いてもっと強く国際世論に訴えていく必要があるのではないかと思う。国際世論の関心が高

⁶民法 772 条により、離婚後 300 日以内に出生した子どもの父親は「前夫」と推定され、離婚前妊娠によって現夫とのあいだに生まれた子供が無戸籍児になる問題。

まれば、発展途上国からの脱却を図るタイ政府もこれまでどおり国内で横行する人権侵害の諸問題を正視せざるを得なくなる。かつて、日本にも「正義」が外国からもたらされたように、構造的な貧困問題や国家による組織的な人権侵害の是正には、国内における様々な改善努力に加えて、時として外からの作用が不可欠なのではないだろうか。

では、タイ政府、あるいはタイに限らずアジア全般において横行している人権問題に対して、当時国政府の重い腰を上げさせる国際世論たり得るものとして、日本政府、あるいは私たち日本人に何ができるのだろうか。日本政府は、アジアにおける人権外交として「日本も、アジアでの橋渡しや弱者保護といった視点を掲げつつ、(中略)世界の人権状況の改善に貢献しています。」という基本的立場を表明しており、基本的原則の3本柱の1つとして「人権は普遍的価値であり、また、各国の人権状況は国際社会の正当な関心事項であって、かかる関心は内政干渉と捉えるべきではないこと」を掲げている⁷⁾。タイをはじめ、アジアの国々で生じている人権侵害に対しては、ASEAN 会合や二国間協議などさまざまな交流の機会を捉えて、根強くアジア諸国の政府に働きかけていくことが重要だと思う。EU 議会が長らくトルコの EU 加盟申請を退けている理由の一つとして「トルコ国内の人権蹂躪の問題」が挙げられるが、日本もアジアのリーダー的立場から、アジア全体の発展のために人権問題に関してイニシアティブをとることが必要であろう。

また、他(タイなど途上国)を律する以前に自ら(日本など先進国)の側にこそ「買春ツアー」のような人身売買や児童買春などを促す原因(需要)があることも見逃してはならない。まずはこのような他国における人権問題を助長する犯罪を、日本をはじめとする先進国の側でくい止める事が何よりも重要である。さらに、私たち一人一人にできることは何か。国際機関の諸活動に従事したり、様々な問題を抱えるアジアの人々の支援・救援活動に携わる NGO 活動に身を投じたりすることも1つの手段である。しかし、そのような実際に問題解決にむけた直接的な行動をとりえない人もいる。私自身も含めて日本人一人一人にとって重要なことは、そうした問題に「常に関心を持ち続けること」であると思う。健康を害したときに初めて健康の大切さに気付くように、幸いなことに差別や人権を脅かされず、平和で安全で、なに不自由無い安穏とした生活を送っている人にとって、「人権」「差別」「平和」といった事象を常に意識することは難しいかもしれない。職業柄、社会の様々な問題に関してなるべく広く関心を持つことを心がけてはいるものの、忙しく繰り返される毎日の生活の中で「人権」「差別」「平和」といったテーマに個人としてどのように向き合うか、このスタディツアーを通して私に与えられたかけがえのない大切な課題である。

⁷⁾<http://www.mofa.go.jp/Mofaj/Gaiko/jinken.html>